

『萬葉集』「七夕歌」☆

——「七夕詩」をふまえて——

はじめに

中国の七夕伝説は、七月七日の夜、牽牛と織女が逢うために、鵲が翼を並べて天の川に橋を架け、それを織女が車で渡って牽牛のもとへ赴くというものである。その伝説をベースとして、「七夕詩」が見られる。上代自主ゼミで私は、『懷風藻』の中の「七夕詩」を取り上げた。『懷風藻』の中の「七夕詩」は、中国の伝説に倣い、織女が天の川に架かった鵲の橋を渡ることが詠まれていて、ここに私は、『懷風藻』が漢詩（中国詩）の影響を色濃く受けている事を再認識した。

ところが、『萬葉集』の「七夕歌」では、天の川を渡るのは、大部分が牽牛（ひこほし）で、織女（たなはたつめ・おりひめ）が牽牛（ひこほし）のもとに赴くとするのは、「七夕歌」一四二首余りのうち、わずかに二首にすぎない。（資料②参照）これは、当時の婚姻形態が妻問婚であったと言う風習にあわせて、中国の伝説を日本風に改変したためであると考えることができる。又、『萬葉集』には鵲も一切登場しない。牽牛は織女のもとに、船を用いて、あるいは歩いて、天の川を渡り、会いに行くのである。

『萬葉集』の「七夕歌」中には、山上憶良や柿本人麻呂、大伴家持など、『萬葉集』を代表する歌人の作も多く見られる。憶良、人麻呂、家持、

それぞれ、まとまった数の七夕歌が残されている。

ともあれ、『萬葉集』「七夕歌」の中に、「七夕詩」の模倣以上の文学的意味を見るためには、これら、「七夕詩」「七夕歌」の相違点の指摘をするに留めず、『萬葉集』の中での、意義を明らかにしてはいてほしいと思う。漢土伝来の七夕伝説と日本古来の織女津女信仰とが相俟って、どのように『萬葉集』に到るのか。『萬葉集』の中ではどのように位置づけられ、時を経て、どのように今日へ伝わったのか。それらを考える上で重要になってくるのが、やはり『萬葉集』なのである。七夕歌の試行錯誤の段階にある『萬葉集』の中に見える七夕と、今日の七夕をつなぐものを見出したい。

『萬葉集』「七夕歌」の分析

夏の夜、天の川を挟む二つの二等星。東に位置するのは、琴座のベガ（おりひめ）。西が鷲座のアルタイル（ひこほし）。その中間の天の川にあるのは、白鳥座の5つの星々が作る、北十字星である。

七夕というと、現在では、夏のはじめ、あるいは、梅雨の季節であるが、旧暦では、夜空に星が美しい秋の初めであり、ゆえに、「七夕歌」は秋雑歌の中に収められているのが主である。秋の空は天気が変わりやす

佐藤 光ひかり 彩

い、しかし、秋晴れという言葉もある通り、秋の初めには低気圧と移動性高気圧が交互に訪れる。秋の空が青く澄んでいるのはこの移動性高気圧によつて空気が乾燥して、水滴が無い上、塵も少ないためである。高浜虚子にも「われの星 燃えてをるなり星月夜」とあるように秋の初めの澄んだ空で月の無い夜はことさらに満天の星の明るさが感じられるという。万葉の時代には天の川は今よりも、気候的にも環境的にも綺麗に見えたに違いない。

資料①にも示した通り、『萬葉集』『七夕歌』のなかで「あまのかは」を「天漢」と書くものは、34首見られた。これは、「あまのがは」と読み下す語彙が全体で42首あるので、約70.8パーセントを占め、「あまのがは+α……」という語彙を含めて、*あまのがは*関係の56首で見ても、半数を有に超える数である。『萬葉集』以外の和歌集についても「国歌大観」を引いたが、「あまのがは」を「天漢」と表記し、詠んでいるものはなかった。

『萬葉集』の「七夕歌」は、巻八以降にはしか見られない。また、奈良時代に先立つ時代の巻にも見られない。(資料①)七夕伝説そのものは、すでに、白鳳時代には、日本に入つて来てはいたが、それが、宮廷ないし、その周辺に広まったのは、奈良時代中期以降である、と考えられる。これを、『萬葉集』以外に、示している資料として、『日本書紀』に見られる、七月七日の宴に関する記載がある。

七月七日、宮中では、白鳳時代から、平安時代初期にかけての頃、断続的ではあるが、天皇が臨席した宴が開かれている。『日本書紀』持統天皇五年、および、七年の、それぞれの七月七日に「公卿に宴を賜

ふ」とある。続いて、『続日本紀』の聖武天皇の天平六年七月七日に「天皇、相撲戯を見觀たまふ。この夕、南苑に徒御し文人に七夕の詩をつくらせしむ」とあり、ついで、孝謙天皇の乞巧奠¹が行われたと思われる、天平勝宝三年の記事が見られる。その後、平城天皇の大同二年「神泉苑に御し、相撲を觀、文人に七夕詩をつくらせしむ」とあり、同じような内容の記事が、翌、大同三年、さらに、嵯峨天皇の弘仁三年、四年、六年と続いていく。これらを見ると、当時は、「昼間は相撲を觀戦し、夕方から酒宴を開き、詩を詠んだ」ようである²⁾。

漢詩集の『懷風藻』にも、藤原不比等の七夕詩が録されている。そこから考えると、七月七日の夜に宴の席で、七夕の詩作をするというのは、持統朝の頃には慣習化されつつあったとも予想される。

しかし、七夕の宴は、宮中の節会としては定着しなかったようである。その理由を、『七夕祭りの話』の中で折口信夫氏が以下のようにまとめている。

それは、淳和天皇の天長元年(824)の七月七日、平城天皇が崩御されたためである。桓武天皇の後、その子の平城・嵯峨・淳和の三人の兄弟が順次皇位をついでいく。淳和天皇にとって、平城天皇は長兄にあたる。このため、七月七日は、国の忌日となり、七夕の詩宴が廃されることになったと考えられている。そして、相撲の觀戦³⁾だけが切り離され、別の日に行われるようになる。

では、今日に受け継がれる七夕説話の元となるものはどのようなので

あろうかという疑問が生じる。この点について、『西王母と七夕伝承』の中で小南一郎氏が、七夕に関連する儀式で、乞巧奠というものの発展の仕方からの考察をしていらつしやるので引用する。

延喜五年に編纂が開始された「延喜式」は、五節会や、その他の節句についての記載がみられる³⁾。また、大蔵省の中の、織部司の行事として、七月七日に「織女祭」をさだめている。すなわち、乞巧奠は朝廷全体のものではなく、一つの省庁の行事として残ったと考えられる。また、貴族の家の年中行事としても続いていく⁴⁾。

このようにして広まった七夕の行事の原型は、七夕の説話自体がどのような内容に取られ、また、七夕の和歌を詠むことがいかにして定着したかということの説明する上で、帰納的にも演繹的にも重要である。例えば、

卷十八の4163番歌

預め作る歌一首

妹が袖 我れ枕かむ 川の瀬に 霧立ちわたれさ 夜更けぬとに

は、七夕ではない日に、七夕の日を想定して作った歌が詠まれていることは、すでに七夕の説話が日本風に改変されて歌の題材になるほど広く流布していた裏付けとなりえるのである。

ここで、次に注目したい点は、この時点で、すでに日本の七夕伝説は中国のそれとは形式を異にするという問題である。

中国詩（漢詩）と日本の詩歌（『懷風藻』の「七夕詩」と『萬葉集』

の「七夕歌」の大きな相違点の一には、「鵲（かささぎ）」というキーワードが上げられるであろう。天の川（漢河）を渡る時、中国では織女が鵲の橋を渡るというのが広く用いられている。小南一郎氏によれば、中国の伝説においては、必ず、鵲が登場するそうである。そして、織女が、鵲の橋をわたり、もしくは、鵲の翼にのり、牽牛のもとへ、お嫁入りをするのである。

しかし、『萬葉集』においては、鵲が一切登場しない。『萬葉集』中では、「ひこほし」が天の川を船でわたり、あるいは、着物の裾を濡らして歩いて渡り、「たなばたつめ（おりひめ）」のもとに行く。少数ではあるが、打橋を渡すものもみうけられた。（資料②）鵲という単語は一切出てこないのである。ただし、『懷風藻』には、鵲の橋が詠まれていて、『萬葉集』と顕著な対称を見せている。（資料②）

では、『萬葉集』はなぜ、鵲が欠落してしまったのか？——それは、当時の婚姻形態が、妻問婚であったことに由来すると、広く言われているし、私もそうに考える。中国においては、早くから、嫁取婚であったというが、これにたいして、日本はというと、男が女のもとへ通うというものであった。

また、社会背景以上に、私が言及したいのが、『萬葉集』での婚姻の取り上げられ方である。『萬葉集』巻一の一には、雄略天皇と土地の娘子の結婚予祝歌があり、ゆえに結婚は、『萬葉集』の重要なテーマの一であると考えられる。もし、七夕歌が、先にも陳べた通り、日本の婚姻形態にあわせて、中国のそれとはちがう形で取り入れられたと考えるならば、和歌の中に読まれた「牽牛」や「織女」の性質までもが変わってくるの

である。

たとえば、中国の七夕伝説の織女（しよくじよ）のモデルの根底には西王母信仰というものであるが、日本はというとこれに加え、我が国古来からの、「棚機津女」⁶信仰が中国から伝来した七夕伝説と習合し、織女（たなばたつめ）を形成しているとかんがえられるのである。中国から七夕伝説や行事が伝わったとき、それが急速にうけいれられたのは、日本に「以前から棚機津女信仰が存在していた」ためであると小南一郎は言う。「たなばたつめ」と読む字は、「棚機津女」とも「織女津女」「織女」とも書く。（資料②）

『懷風藻』や『萬葉集』の中に七夕歌は多くあるが、詠む人の心情を吐露したような、逢いたいという、情熱に関する詩が多く読み込まれている歌はあまり、見受けられない気がする。詩や和歌などの題材としては格好の情景や悲恋が凝縮された、純度の高い伝説がベースとなっているのに、内情を吐露しているというよりは、漢文や、漢詩の知識に裏打ちされた、学識ある和歌が大半を占めているとの感想をもった。それは、「題材の性格上、傍観者の立場から詠んでいる」（渡瀬昌忠氏「人麻呂歌集非略体歌論下——七夕歌群論——」より引用）ものが多いからかもしれない。

『萬葉集』の「七夕歌」に、このような感想をもった私であるが、今回、七夕歌を取り上げるにあたって、特に、『萬葉集』巻十「秋雑歌」の冒頭の三十八首（1196〜2033・資料②参照）柿本人麻呂歌集出の七夕歌に関する様々な論文を読んで、その、技巧の巧みに、感動を覚

えた。確かに、自分の内情を吐露するような、情熱的な歌たちではないけれども、客観的、叙情的に、二人の関係を詠んでいることから汲み取れるものは多い。ここでは、それらを紹介したい。

大久保正氏「人麻呂歌集七夕歌の位相」では、これらの和歌全体の構成や、配列について述べておられる。牽牛と織女が天の川を越えて逢う前の抒情を表現した部分（第一部）・七夕物語をおった形式の物語説明的部分（第二部）・補遺（第三部）からなるとしている。

これに対し、伊藤博氏「七夕の世界」は、「第三者の立場から当事者の立場への、歌の反復」がみられるとしている。

そして、私が参考とした本の中で、一番新しく（平成14年発表）、なおかつ、諸氏の論も踏襲している論文として、渡瀬昌忠氏「人麻呂歌集非略体歌論下——七夕歌群論——」があるのだが、この中で氏は、三十八首の中の第三十一首までを以下のように分けて考えている。以下は、渡瀬昌忠氏「人麻呂歌集非略体歌論下——七夕歌群論——」からの引用である。万葉集と照らしあわせて鑑賞していたきたい。

以下引用部

【前半 五群十八首 七夕以前】

I 牽牛星が月人壮士と織女について問答する。

番号 巻歌番号 詠んでいる人

① ⑩ 1996 牽牛

② ⑩ 1997 月人

第一歌群①②二首は牽牛星と月人壮士との出会いを示し、月船が天漢を渡るときに、月人壮士が望見した織女星の悲嘆の様子を書いて、前半歌群の導入部とする。

II 月人壮士、牽牛の使者となる。

- ③ ⑩ 1 9 9 8 牽牛
- ④ ⑩ 1 9 9 9 月人
- ⑤ ⑩ 2 0 0 0 牽牛
- ⑥ ⑩ 2 0 0 1 月人

III 月人壮士、織女の様子を報告する

- ⑦ ⑩ 2 0 0 2 牽牛
- ⑧ ⑩ 2 0 0 3 月人
- ⑨ ⑩ 2 0 0 4 月人
- ⑩ ⑩ 2 0 0 5

牽牛星とこのように対英した月人壮士は、その牛宿を去り、次の女宿の北の方の織女星のもとに牽牛星の使者として再び行つ、第四歌群を牽牛星と歌いかわす。

IV 月人壮士、再び、牽牛の使者となる

- ⑪ ⑩ 2 0 0 6 月人
- ⑫ ⑩ 2 0 0 7 牽牛
- ⑬ ⑩ 2 0 0 8 牽牛
- ⑭ ⑩ 2 0 0 9 月人

月人壮士は、織女の「伝へ」を携えて、それを早く牽牛に伝えるべく、

女宿を去つて、二十八宿をめぐる黄道沿いの遠い旅路をいそぐ、月人壮士は姿を消すのである。一人牽牛星が、天漢のほとりに待つ。そして、七夕以前最後の歌群となる。

V 牽牛星、待ちつつ独詠する

- ⑮ ⑩ 2 0 1 0 牽牛
- ⑯ ⑩ 2 0 1 1 牽牛
- ⑰ ⑩ 2 0 1 2 牽牛
- ⑱ ⑩ 2 0 1 3 牽牛

⑮⑯の二首が使者の帰来・出現を待つのに対して、後半の⑰は、牽牛が織女と、⑰「逢はむ日」を「待」ち、七夕の近づいた⑱「時」(秋七月)の到来を歌つて、七夕以前の前半歌群十八首は終わる。

【後半(四群十首) 七夕当日の夜の逢瀬と翌朝の別離】

VI 牽牛星、七夕当夜に織女星に逢いにいくが、まだ逢えない。

- ⑲ ⑩ 2 0 1 4 牽牛
- ⑳ ⑩ 2 0 1 5 織女
- ㉑ ⑩ 2 0 1 6 牽牛
- ㉒ ⑩ 2 0 1 7 織女

VII 牽牛星、深夜に織女星と逢う

- ㉓ ⑩ 2 0 1 8 牽牛
- ㉔ ⑩ 2 0 1 9 織女
- ㉕ ⑩ 2 0 2 0 織女
- ㉖ ⑩ 2 0 2 1 牽牛

VII 翌朝、牽牛星、織女星と別離する

②7 ⑩ 2 0 2 2 牽牛

②8 ⑩ 2 0 2 3 織女

②9 ⑩ 2 0 2 4 織女

③0 ⑩ 2 0 2 5 牽牛

IX 結び歌、牽牛星、別離の後を思う

③1 ⑩ 2 0 2 6 牽牛

後半歌群は、七夕到来を客観的に叙している。七月七日の夜から、翌朝にかけての、よくしられた牽牛と織女の逢瀬と別離とが主題である。

以上までが引用部分である。

歌を詠む人の個人的な思いを詠んでいるのではなくて、わざわざ、七夕伝説を歌にして詠んでいる背景には、もしかしたら、祭典（節句・年中行事）の中で、七夕伝説を、人々に詠みきかせ、美しい星空を見上げ、思いを馳せるため、または、情景を喚起させるためという理由があったように思う。そのためには、七夕伝説と、自分の立場をシンクロさせて、（彦星と織姫を、自分と恋人にかさねて）詠むという歌が多く見られる、古今和歌集以降の和歌のような形ではなく、万葉の時代においては、物語の展開する順を追うことが、大切であったように感じる。ひとつひとつの七夕伝説を確認しながら、その中に、さりげなくではあるがいかにか自分ではなく、彼ら（牽牛と織女）の気持ちがあぶりだされているかというの、詠み人の力量であると感じる。人麻呂の和歌の表面は、順を

追った七夕の説明であるかのようにみえるが、諸氏の分析のように、一首一首を整理して、改めて全体を見ていくと、しっかりとそこに、牽牛と織女の気持ちが存在しているのである。『萬葉集』の「七夕歌」がしっかりと、中国の七夕伝説を日本の中に摂取した形を、歌にのこしてくれただからこそ、日本風七夕説話が、人口に膾炙し、今日に変わらないう形で伝わってきたともいえるだろう。これはけっして『懷風藻』ではなしえなかったことであり、古今和歌集以降にみられる表現方法に結びついていると思う。願わくは、「七夕」という万葉から伝わる珠玉の物語が、これから先も変わることなく伝わり、より、素敵な作品の根底にあるものになればと思う。

注

（1）巧公奠 現在に七夕として伝わるものの原形。7月7日の夜に、笹をたて、願い事を書いた短冊をつるす。

古代においては、奈良時代に中国から伝えられる。巧公奠は巧みであることを乞う祭典で、女性だけで営まれる女性の祭典。庭に台をしつらえ、女性は美しく着飾りる。酒、瓜、台に餅などを供え、自分が作った手仕事の作品を供える。

（2）『七夕祭りの話』 折口信夫氏 参照

（3）延喜五年に編纂が開始された延喜式は、五節会として、元旦（1月1日）・白（あおうま）（1月7日）・踏歌（とうか）（1月14日・16日）・端午（たんご）（5月5日）・豊明（とよのあかり）（新嘗祭の翌日）を定め、他に相撲（すまい）（7月28日・29日）・重陽（ちようよう）（9月9日）などの節句を加えている

（4）冷泉家（藤原俊成・定家）では、現在もなお、年中行事として、乞巧奠を行っている。和歌の家なので、夜空に祈るのは和歌の上達であり、織物や縫い物などの、女性の手仕事の品を供えるのではなく、星を祭る祭壇に向かっ

て、自作の和歌を朗詠するものである。

卷9 計3首

雑歌

泉河邊門人宿衾

1 6 8 6

七夕歌一首併せて短歌

1 7 6 4

反歌

1 7 6 5

→右件歌或云中衛大將藤原北卿宅作也

卷10 計108首

秋雑歌

柿本人麻呂歌集出三八首

1 9 9 6 ・ 1 9 9 7 ・ 1 9 9 8 ・ 1 9 9 9 ・ 2 0 0 0 ・ 2 0 0 1 ・ 2 0 0 2 ・ 2 0 0 3 ・ 2 0 0 4 ・ 2 0 0 5 ・ 2 0 0 6 ・ 2 0 0 7 ・ 2 0 0 8 ・ 2 0 0 9 ・ 2 0 1 0 ・ 2 0 1 1 ・ 2 0 1 2 ・ 2 0 1 3 ・ 2 0 1 4 ・ 2 0 1 5 ・ 2 0 1 6 ・ 2 0 1 7 ・ 2 0 1 8 ・ 2 0 1 9 ・ 2 0 2 0 ・ 2 0 2 1 ・ 2 0 2 2 ・ 2 0 2 3

読み人知らず 七〇首

2 0 2 4 ・ 2 0 2 5 ・ 2 0 2 6 ・ 2 0 2 7 ・ 2 0 2 8 ・ 2 0 2 9 ・ 2 0 3 0 ・ 2 0 3 1 ・ 2 0 3 2 ・ 2 0 3 3 ・ 2 0 3 4 ・ 2 0 3 5 ・ 2 0 3 6 ・ 2 0 3 7 ・ 2 0 3 8 ・ 2 0 3 9 ・ 2 0 4 0 ・ 2 0 4 1 ・ 2 0 4 2 ・ 2 0 4 3 ・ 2 0 4 4 ・ 2 0 4 5 ・ 2 0 4 6 ・ 2 0 4 7 ・ 2 0 4 8 ・ 2 0 4 9 ・ 2 0 5 0 ・ 2 0 5 1 ・ 2 0 5 2 ・ 2 0 5 3 ・ 2 0 5 4 ・ 2 0 5 5 ・ 2 0 5 6 ・ 2 0 5 7 ・ 2 0 5 8 ・ 2 0 5 9 ・ 2 0 6 0 ・ 2 0 6 1 ・ 2 0 6 2 ・ 2 0 6 3 ・ 2 0 6 4 ・ 2 0 6 5 ・ 2 0 6 6 ・ 2 0 6 7 ・ 2 0 6 8 ・ 2 0 6 9 ・ 2 0 7 0 ・ 2 0 7 1 ・ 2 0 7 2 ・ 2 0 7 3 ・ 2 0 7 4 ・ 2 0 7 5 ・ 2 0 7 6 ・ 2 0 7 7 ・ 2 0 7 8 ・ 2 0 7 9 ・ 2 0 8 0 ・ 2 0 8 1 ・ 2 0 8 2 ・ 2 0 8 3 ・ 2 0 8 4 ・ 2 0 8 5 ・ 2 0 8 6 ・ 2 0 8 7 ・ 2 0 8 8 ・ 2 0 8 9 ・ 2 0 9 0 ・ 2 0 9 1 ・ 2 0 9 2 ・ 2 0 9 3

0 9 1 ・ 2 0 9 2 ・ 2 0 9 3

卷15 計4首

柿本朝臣人麻呂歌

3 6 1 1

七夕に天漢を仰ぎ観て

3 6 5 6

各々も所思を陳べて読み人知らず

2 6 5 7 ・ 3 6 5 8

作る歌三首

卷18 計2首

七夕歌一首併せて短歌

4 1 2 5

反歌二首

4 1 2 6 ・ 4 1 2 7

卷19 計1首

予め作る七夕歌一首

4 1 6 3

卷20 計8首

七夕歌八首

4 3 0 9 ・ 4 3 1 0 4 3 1 1 ・ 4 3 1 2 ・ 4 3 1 3

資料②

【語彙 vocabulary の分析】

注 ← ⑧⑨⑩…など、○抜き文字は巻の番号

旧国歌大観番号

◇あまのがは

① 天漢（あまのがは）と書く例

⑧ 1 5 1 8 ・ ⑧ 1 5 2 2 ・ ⑨ 1 7 6 5 ・ ⑨ 1 7 6 4 ・ ⑩ 1 9 9 6 ・

人名・動植物名の分析

◇ひこほし

①牽牛（ひこほし）

⑩ 2 0 0 0 ・ ⑩ 2 0 0 1 2 ・ ⑩ 2 0 0 1 3 ・ ⑩ 2 0 0 1 5 ・ ⑩ 2 0 0 1 8 ・
 ⑩ 2 0 0 2 0 ・ ⑩ 2 0 0 2 9 ・ ⑩ 2 0 0 3 3 ・ ⑩ 2 0 0 3 8 ・ ⑩ 2 0 0 4 2 ・
 ⑩ 2 0 0 4 3 ・ ⑩ 2 0 0 4 5 ・ ⑩ 2 0 0 4 7 ・ ⑩ 2 0 0 4 8 ・ ⑩ 2 0 0 4 9 ・
 ⑩ 2 0 0 5 3 ・ ⑩ 2 0 0 5 6 ・ ⑩ 2 0 0 6 2 ・ ⑩ 2 0 0 6 3 ・ ⑩ 2 0 0 6 7 ・
 ⑩ 2 0 0 6 8 ・ ⑩ 2 0 0 6 9 ・ ⑩ 2 0 0 7 6 ・ ⑩ 2 0 0 8 1 ・ ⑩ 2 0 0 8 2 ・
 ⑩ 2 0 0 8 3 ・ ⑩ 2 0 0 8 4 ・ ⑩ 2 0 0 8 5 ・ ⑩ 2 0 0 8 9

②天河（あまのがは）と書く例

⑧ 1 5 2 9 ・ ⑩ 2 0 0 4 4 ・
 ⑩ 2 0 0 5 5 ・ ⑩ 2 0 0 5 9 ・
 ⑩ 2 0 0 6 1 ・ ⑩ 2 0 0 7 1 ・
 ⑩ 2 0 0 7 4

③天川（あまのがは）と書く例

⑩ 2 0 3 0

◇あまのがは+α

①天漢原（あまのかはら）

⑩ 1 9 9 7 ・ ⑩ 2 0 0 3

②天漢道（あまのかはじ）

⑩ 2 0 0 1

③天河津（あまのかはづ）

⑩ 2 0 1 9 ・ ⑩ 2 0 0 7 0

④天津（あまつ）

⑩ 2 0 4 1

⑤天原（あまのはら）

⑩ 2 0 0 5 1 ・ ⑩ 2 0 0 6 8

⑦天瀬（あまのかはせ）

⑧ 1 5 1 9

⑧天川間（あまのかはと）

⑩ 2 0 0 4 0

⑨天之河原（あまのかわはら）

⑩ 2 0 0 9 2 ・ ⑩ 2 0 0 9 3

c f、安川原 ⑩ 2 0 3 3

天原+天漢 ⑩ 2 0 6 8

月累（つきかさね） ⑩ 2 0 5 7

◇たなばたつめ・おりひめ

①織女（たなばたつめ）

②織女（たなばた）

◇ひこほし+たなばたつめ

①牽牛・織女

②孫星+織女

◇つきひとおとこ

①月人壮

②月人壮子

◇をちたかひと

①越方人

◇わたりもり

◇あめひと	渡守
-------	----

天人

⑩ 2 0 9 0	⑩ 2 0 7 2 ・ ⑩ 2 0 7 7 ・ ⑩ 2 0 8 7 ・ ⑩ 2 0 8 8
-----------------------	---